

2024年6月23日

「主に望みをおく人は」

イザヤ書 40:27-31

坂元 高牧師

今朝の旧約聖書イザヤ書 40 章は、偉大な預言者イザヤの名を無名ながら引き継いだと言われる、第 2 イザヤ書の序曲部分となっています。ふるさとの高い山に咲く、草や花にたとえて歌う第 2 イザヤのメッセージは旧約を飛び越えて、まるで「福音そのもの」とでも言うべきメッセージとなっており、「見よ、あなたの神、主なる神よ」と叫ぶ、信仰告白とも言える力強い内容ともなっているのです。

ひるがえって、この私たちも、先の見えないまるでこの世の終わりか、というような時代に生きています。それでも私たちが、なんとかして生きようとするのであれば、思い切って未来や不安な部分について、「委ねるお方」というものを持っていなければなりません。その「委ね先」というのは、自分でも他の誰かでもなく、「神さま」です。

そういう生き方こそが、自分ではなくて、「主に望みをおいて生きる」ということではないでしょうか。私たちが「委ねるもの」「委ね先」を持てばこれから先がどんなに不安であっても、私たちはそのお方に身を委ねて、希望を託して生きて行くことが出来るのではないのでしょうか。揺らぐことなく、迷うことなく、そして、新しい力が神から与えられて驚のように翼を張って上っていく、そんな風に私たちも変わっていくことが出来るのでは…と。

ある教会の先生が言いました。「信仰とは、結局究極の存在の神に、イエス・キリストに自分を委ねることです。」と。それは、我とわが身に望みをおくのではなく、「神に、人となられた神・キリストに望みをおいて生きていくこと」に他なりませんね。

さあ、共に祈りつつ、主に望みをおいて歩む者とされましょう。